Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-14

法然・親鸞の夢想 ： 祖師伝絵が描く聖体示現

仙海, 義之

(Citation)
美術史論集,8:24-40

(Issue Date)
2008

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010392

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010392

研究論文

法然・親鸞の夢想
―祖師伝絵が描く聖体示現

《キーワード》祖師絵伝・法然上人絵伝・善信聖人親鸞伝絵

仙海義之

一

先に、拙稿「鎌倉絵巻に描かれた祖師と僧俗　―法然・親鸞・一遍の絵伝から―」（『史潮』新六一号、歴史学会、二〇〇七・五）によって、祖師伝絵に於ける絵画表現の特質を、聖と俗との二面から概観した。この内、祖師に聖性を付与する手法の一つとして、「奇瑞の描出」という表現に着目した。

前稿では、法然が善導と対面し、親鸞が救世観音より夢告を受け、一遍が熊野権現より神託を受ける等、各祖師の信仰の起点とも言うべき重要な出来事が、何れも夢想を媒介として表されている事を指摘し、こうした奇瑞を描き出す事によって、祖師が非凡な能力を持つ者である事を表したと解した。本稿では、祖師伝絵の中で、夢想の描出という表現が担った役割について、更に考を深めてみたい。

考察の対象としては、「法然上人伝絵」（知恩院、四十八巻本。[1] 以下「法然伝絵」と簡称）と「善信聖人親鸞伝絵」（専修寺、高田本。[2] 以下「親鸞伝絵」と簡称）とを取り上げる。

二

まず、「法然伝絵」の中から、夢想を扱った場面を取り上げる。「法然伝絵」巻七段五（挿図1）は、法然が夢の中で善導に遇ったというエピソードを表す。[3]「二祖対面」「善導来現」などと簡称される逸話である。半身金色の姿で現れた善導が、法然が専修念仏を布教する様を称賛した。善導からの夢告によって、法然の信仰の正当性が裏づけられるものとなった。

画図は、第十八～第二十紙の三紙を接いで、横幅一三〇センチ強の画面を作る（第十八紙は、幅三一・八センチと、やや短小）。画面の中央に、小渦を合わせながら波立つ、強い流れの河を表す。詞書に「はるかに西方を見たまへは」との文言があり、また画図でも法然の姿を左方に向けて描いている事から、凡そ画面右方が東、左方が西と意識されているものと知られる。ところが、詞書に「碧水北より出て波浪南になかる」と有るにもかかわらず、その流れを画面の右上から左下へと斜めに描いている。これは、絵巻物特有の縦

挿図１　「法然伝絵」巻七段五（部分）　京都市・知恩院所蔵　国宝

方向が狭小な画面上に、奥行きのある空間を表出しようとする手法から、南北の流れを対角線上に横たえたる事としたものと解せられる。

しかしながら、この事によって、絵巻物の観者にとっても手前と意識される、法然が立つ川岸と、流れを隔てた奥の空間として意識される、善導が来現する空中との位置関係が明快に把握されるものとなった。此岸と彼岸との関係としてである。合掌して立つ法然は、その頭部が左横から見られたプロフィールとして描かれるのは、個性ある風貌を描写する為の選択であろうが、また体部は背面を多く見せて、左斜め後ろから見られた様に描かれる。一方、善導は右前から見られた様に描かれている。二祖は、表出された絵画空間に則し、それぞれが此岸と彼岸との立場にあって相対している様が、瞭然と目視し得る図様となっている。更に言えば、観者もまた、此岸から法然と同じ側に立って、善導の来現に接する事を可能としている。

こうした、画面上に表出された、明快な空間構成、二祖の位置関係からか、全く疑念無く描画内容が受け入れられる訳であるが、しかし、詞書のみを読む限りでは、二祖が河を隔てて対面した等という事は何処にも読み取れない。それは、「二祖対面」に関する先行した伝記類である所の、

「夢感聖相記」（『拾遺黒谷上人語燈録』[4]）

「法然聖人御夢想記（善導御事）」（『西方指南抄』[5]）

等でも、対面が河を隔てて行われた等との記述は無いし、更に、

「源空聖人私日記」（『西方指南抄』[6]）

では、河自体についての言及も無い。また、「二祖対面」の場面を描いた先行作例では、

善導寺本（『本朝祖師伝記絵詞』）巻一段一六　麓に河を描いた山の中腹で、二祖は対面している。[7]

妙定院本（琳阿本）巻三段四　法然は山の麓に立ち、善導の乗る雲は河を越えて、法然の頭上に来現している。

増上寺本　巻下段四　河は描かれない。

等と、何れも、河を挟んでの対面とは描かれない。「法然伝絵」で、河を挟んでの二祖の対面を観る我々は、これを当然の事の如く受け

入れてしまうのであるが、先行する史料や伝絵に於いては、決して既成の事ではなかったのである。「二祖対面」の場面の描出については、「法然伝絵」に於いて、独自の創意が払われたと見なす事ができよう。

その彼岸上には、降下する雲上に善導の姿を影現させる。ここで、善導は、鬚髪をたくわえた個性的な風貌に描かれる。何らかの具体的な肖像等に基づいて表された像容であろうか。一方、その下半身のみが金色に表される点が特に注目される所である。詞書に「そのさま腰よりしもは金色にしてこしよりかみは墨染なり」とある様を、描き出したものとなる。その様は、「夢感聖相記」では「腰上半身、尋常僧相、腰下半身、金色佛相。」と示され、また、善導寺本では、画中詞に「もすそよりしもは阿弥陀如来の御装束にて現して」と記される。そして、その善導寺本の画図では、金色の下半身のみならず、金色の踏み分け蓮華座を表している。これにより、金色に表される善導の下半身は、雲上に立って来迎する阿弥陀の像を、イメージの淵源として参照していたであろう事が類推される。善導の像容のみならず、善導が降臨する画面の左方に急峻な山崖を描くのも、「早来迎図」（知恩院、国宝）等、来迎図の図様が残存しているものと見る事が出来る。

さて、林淳氏は「善導の黒衣の上半身は、地上の凡夫の象徴であり、下半身の金色は極楽浄土にある阿弥陀仏を表わす」と述べ、「夢の中で善導が二色に分けて出現したのは、法然の二元論的思考によるもの」とその構想の意味を解されている。[8] この説を倣って、二元論的な分析の手法を、更に画面構成の解釈に応用してみたい。

つまり、「法然伝絵」の「二祖対面」の画図に於いて、彼岸と此岸との対照が明瞭に描かれるのも、二元論的思考の図式に則って、象徴的な画面構成が導入されたものと解する事が出来るのである。

「法然伝絵」の画図で、善導と法然との間に河が横たえられ、それぞれが彼岸と此岸と、即ち、聖なる空間と俗なる空間とに振り分けられて表されたのは、二者の関係性を明示しようとした絵画的演出であったと言える。二つの異なる空間を境界づけるに当たって、その間に河が横たえられたのは、既に同様の手法に習いが有っての事であろう。説話内容・描画要素を違えるものではあるが、近世の二河白道図の内、横長のプロポーションを持つ作品の画面構成が、「法然伝絵」「二祖対面」のそれと類縁性を有するものである事は興味深い。蓋し、聖なる空間と俗なる空間との対照のみならず、観者の視点をも含めた、此岸と彼岸との対置という点で、勝れた図様と認められたからであろう。

如上の通り、「法然伝絵」では、「二祖対面」の描出に当たり、特に創意が払われた様が窺われる。夢中で善導の来現を被った出来事が、重視されたからに他ならない。

ところで、『観無量寿仏経疏』に拠れば、善導自身、『観経疏』を作ろうと至心発願してより、毎夜、夢中に一僧が現れて、『観経』の玄義を授けられたという経緯があったと知られる。

某、今、欲出此『觀經』要義、楷定古今。[…]已後、毎夜夢中、常有一僧、而來、指授玄義科文。（大正蔵No.一七五三『観無量寿仏経疏』巻四）

法然は、『選択本願念仏集』の中で、善導が夢中に玄義を授かった

という一僧について、阿弥陀が応現したものであろう、との解を付して、この出来事に留意している。

就中、毎夜、夢中有僧、指授玄義。僧者、恐是、彌陀應現。爾者可謂、此『疏』是、彌陀傳説。何況、大唐相傳云「善導是、彌陀化身也。」爾者可謂、又此文是、彌陀直説。

この、善導が夢中に一僧の来現を受け、経意の玄義を授かったという経緯は、善導・法然の「二祖対面」の原形となる出来事であったとして、既に指摘されている所である。しかしながら、善導の得た夢中のイメージが、〈対面〉する形式のものであったがどうかについては、これを証する事が出来ない。上引の善導・法然の述、何れの文言に依ったとしても、例えば、善導の夢中に独尊像の如く現れた一僧が、夢を見ている善導の意識に対し、モノローグする様な形式で指授をした、という有様を想定する事が出来るのである。

法然はまた、『黒谷上人語燈録』でも善導を讃えてその垂迹門に十の徳を挙げる内、「五造疏感夢徳」として善導に霊夢が有った事に触れる。ここで法然は、この出来事を、聖徳太子が夢中で金人から深義を授かった事に準えている。

師、欲造『觀經疏』。而先七日、祈請其事、即感靈夢。其状具載『疏』第四卷。例如吾朝、聖徳太子、造『法華疏』時、即入夢殿、金人東來、指示深義也。（巻九「善導十徳第十二」）

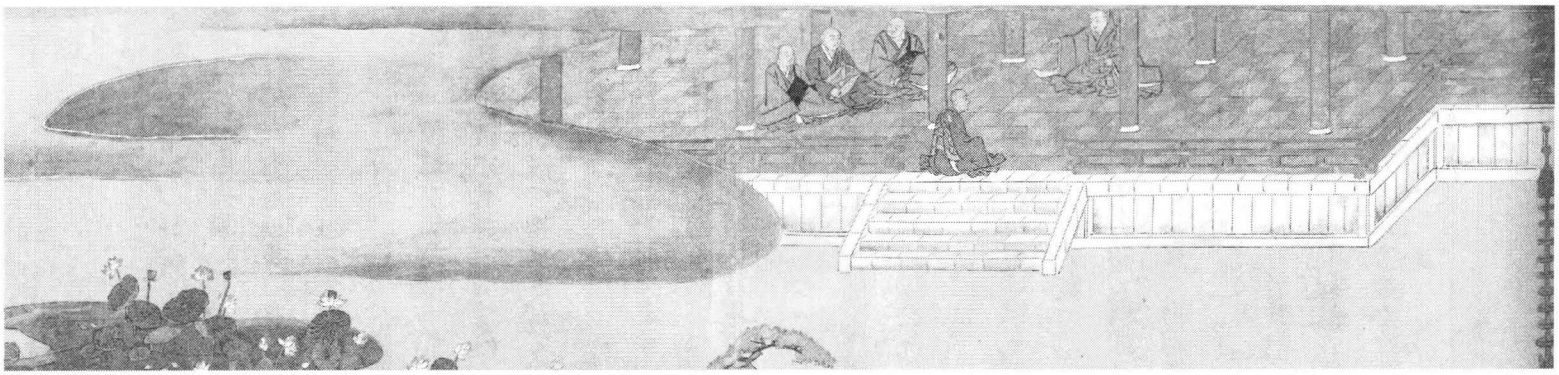
けれども、『三宝絵詞』『日本往生極楽記』『今昔物語』等の記事からも、太子と金人とが夢中に〈対面〉したというイメージは、読み取れない。金人による指示は、モノローグの形式であったのか、ダイアローグの形式であったのか、明らかにはならない。

伝絵の画図に描かれた〈対面〉は、伝絵の作者が独自に脚色した演出という訳ではなく、『夢感聖相記』の「有一高僧、出於雲中、住立吾前。予、即敬禮、瞻仰尊容。」などの文言や、善導と法然とが夢中で対話する様子から、既に法然自身が得ていた夢想中のイメージであった事が明らかである。法然が得た〈対面〉のイメージには、善導への一僧の指授とは別の、その原形となる様な出来事があったのであろうか。

『黒谷上人語燈録』が続いて挙げる「十形像神變徳」では、同書中、前段「淨土五祖傳第十一」の「第五位少康法師」に引いた『宋高僧傳』（大正蔵№二〇六一）巻二五（讀誦篇第八之二）「唐睦州烏龍山淨土道場少康傳」等、三伝の記事を承けて、唐代の少康（？―八〇五）が、長安の善導の影堂を礼拝した際、善導の形像が忽ち空中に昇り、善導の教えによって衆生を化益する少康を誉め、その功により少康が極楽往生する事を証したという神変があった事を記している。

少康、遂之長安善導影堂、大陳薦獻。時彼遺像、忽昇空中、謂康曰「汝依吾事、利益有情。則汝之功、同生安樂。」康、聞其言、如有所證、是也。（巻九「善導十徳第十二」）

夢中の出来事ではなく、また、形像を媒体とするものではあるが、善導から讃歎を受け、往生を証されるという内容ばかりか、空中から対告を受けるという光景に、法然・善導の〈対面〉の状況との親近性が窺われる。「後善導」と称され、善導の嗣法者と見なされた、少康が体得した所の神変であっただけに、同様に善導を慕う法然にとって、当然、注意された出来事であったろうと想像さ



挿図2　「法然伝絵」巻二〇段二（部分）　京都市・知恩院所蔵　国宝

れる。法然が夢想した〈対面〉というイメージには、少康が得た神変の体験が原形として引き継がれているのではないだろうか。

この様に「二祖対面」イメージの原形には、善導が夢中に来現した一僧から『観経』の玄義を指授された事、そして、少康が拝した善導の遺像から善行を認められ往生を証された事、という二つの出来事があったものと考えられる。こうした先聖の奇瑞を、引き継ぐ形で繰り返したものとして、法然が夢中に示現した善導から善行を誉められた、という出来事が意味を持つのである。

そしてまた、法然も、自身の門弟に夢見られる存在となる。

「法然伝絵」巻二〇段二（挿図2）は、弟子の随蓮が、夢中に法然より決定往生の教えを受けたというエピソードを表す。[9]「随蓮夢中説法聴聞」等と簡称される。「法然伝絵」中、法然の事績としては取り上げられにくい段ではあるが、画図の上からは、料紙四枚を接いで、一九〇センチ近い長大な画面を作る段の内の一つと知られる。料紙四枚を接いで画面を作る例としては、巻一段四「時国館夜襲」・巻八段五「頭光踏蓮」・巻九段四「十種供養」・巻十三段一「無品親王往生」・巻三十三段一「安楽房処刑」・巻三十五段三「月輪殿往生」・巻三十七段五「法然臨終」等がある。何れも、法然事績中の主要な事柄を表す段と認められ、中には、高位の人物との関係を扱って、豪華な場面を描き出す段も見受けられる。随蓮の夢想を描く画面は、これらの段の画図に比して、画面を構成する要素が少なく、描画内容も単純なものといえる。何故、門弟の一人として数えられるに過ぎない随蓮の夢想を描き出すのに、かくも長大な画面が用いられる事となったのか。

画図では、画面右方は、法勝寺の伽藍の一部が広く表され、堂内に法然を始めとする僧達の姿が見える。平安京の東、白河にあった六勝寺の内、最大の法勝寺は、白河天皇が承保三年（一〇七六）に建立してより「国王の氏寺」と称され、代々の天皇家の尊崇を受けた。その、高さ八〇メートルあったという八角九重塔は、当に王権を表象するモニュメントであった。画面の下端には、寺塔の頂上部のみが描かれるが、のびやかな九輪等の様子から、当時の人々には、豪壮な建造物の偉観が、直ぐさま思い浮かべられた事であろう。露盤下から広がる瓦屋根の棟が、手前だけでも四筋見えるのは、八注の形状を示そうとした表現と認められる。

回廊で繋がる堂宇は、列柱・勾欄の朱、床石の碧緑、基壇の白が映え合って、画面を華やかなものとしている。画面の中央近く、堂の中では、階を上がった随蓮とおぼしき僧が、法然に対座する。法然は、画面左方を指し示す如く、右手を胸前に伸ばしている。その画面左方では、州浜形の池中に、法然の説法中に言及される、蓮の花が咲き乱れる。青い水面に、蓮葉の緑と蓮華の紅白とを鮮やかに措き、深い霞を負った静謐な一隅を描き出す。池畔の柳・松とが、雅な風情を高めている。全体として、上品な画趣を湛えた画面作りが為されていると言える。この場面の作画に当たった絵師は、法然の配流や廟堂への参集など、伝絵中の主要な場面の幾つかを手掛けている、筆の立つ絵師である。この段が、特別な意味が込められた場面であったのではないかと推察される所以である。

けれども、あくまでも随蓮が夢中に看取した出来事を表すものであり、詞書や画図の内容を史実の中で検証する事は出来ない。こうした夢想自体が実際にあった事なのかどうか、四十八巻本以外に、このエピソードを取り上げた書物も無く、これを閲する術は無い。巻二〇は、果を被った門弟達の往生譚を列する事により、法然の功績を讃えるべく編集された巻であるようだ。むしろ、この随蓮の夢想は、フィクションとして、四十八巻本に挿入された説話とも想像される。

法然と法勝寺との関係についても、事績の中からは知られない所である。一つには、詞書に印象深く記される、蓮の花に喩えをとった法然の高説の内容に則して蓮池が描かれ、その法然による説法の場を荘厳する意味で、華やかな法勝寺が持ち出されたと理解することが出来る。一方、夢中に於ける法然と随蓮との対面という設定に着目すると、法然が夢中に示現するに相応しい場として、王権を背景とした豪壮な寺院と誰にも知られていた、法勝寺が選ばれたものと想像する事が出来る。

詞書に依れば、随蓮は、法然が配流された際には「御とも申て帰依あさからさりき」との縁を有し、その後にも、法然の念仏往生の教えを「ふかく信受してふた心なく念仏しけり」という篤信の者であったという。ところが、上人往生の後、「いかに念仏すとも学問して三心をしらさらむには往生すへからす」という他の者の言に、専修念仏に対する疑念を抱く様になったという。この後、随蓮は、或夜の夢で、法勝寺にて法然により法談が行なわれている座に接した。すると、法然から直に召されて「『念仏して往生する事は決定して疑なし』とをしへしを信たるは蓮花を蓮花とおもはむかことし」と諭されたと夢見て、疑念が晴れたという。

随蓮は、法然の教えを実直に信奉する一面、また、時として教義に対し不安を抱く事もあるなど、大多数の普通の信者を代表する性格を与えられた人物として表されている。つまり、法然を夢中に拝した、随蓮という個人を特筆しようとする訳ではない。むしろ、門弟の誰彼でもあるような、随蓮の如き者の夢中にも現れて教えを垂れる様を表す事により、祖師としての法然の高徳を顕現させる事に主眼があったと捉えるべきであろう。この段の画図には、夢中に拝される法然の姿を表す事によって、法然に聖性を付与するという、特別な意図が込められていたと推察される。

「二祖対面」の夢想と「随蓮夢中説法聴聞」の夢想とは、関連付

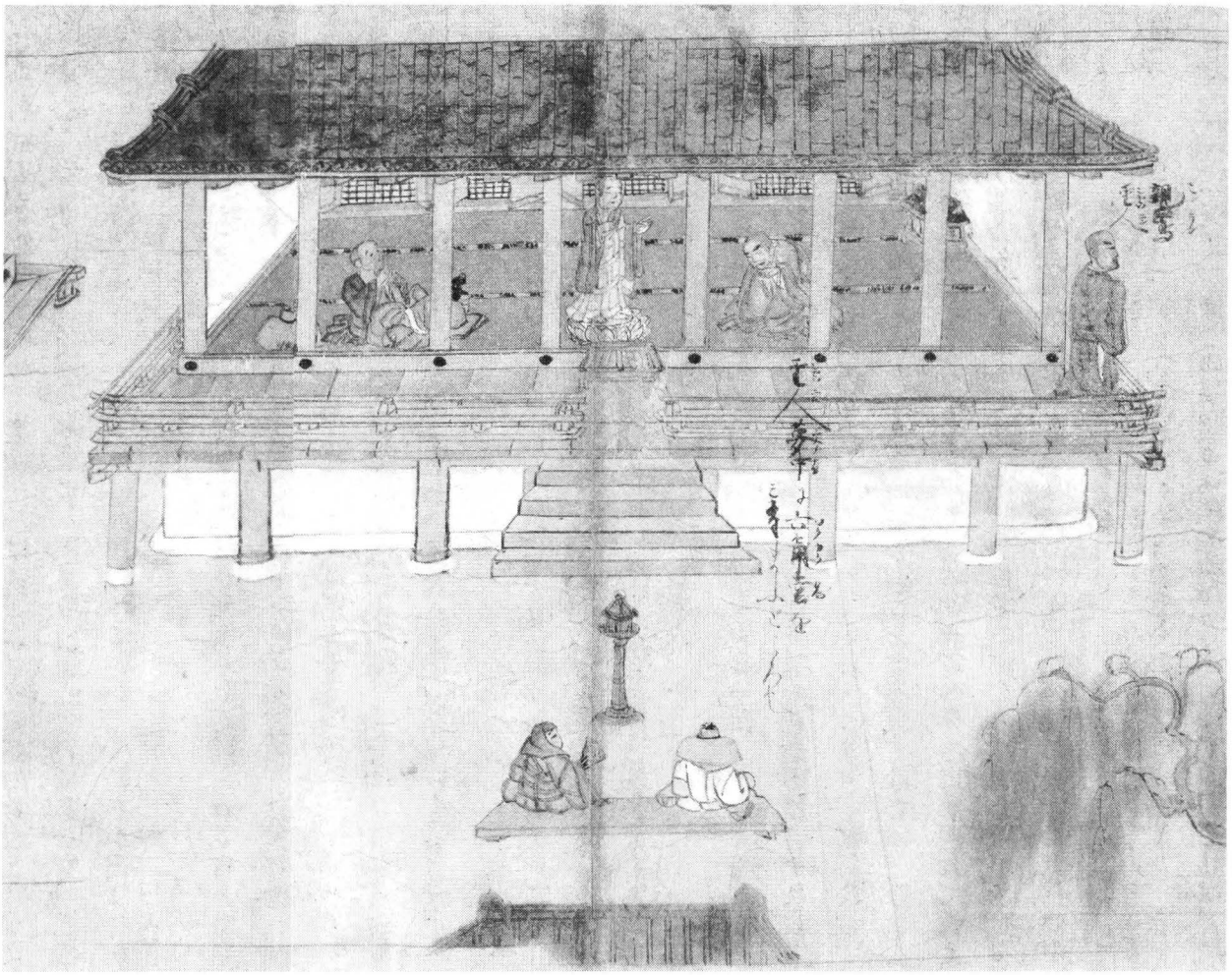
けて了解されるべきであろう。夢中に善導を示教した一僧や、また、少康に神変を現し、法然の夢中に示現した善導の如く、法然もまた、門弟の夢中に拝される存在として表される事となった。信奉者の夢中に示現して、教義の深奥を告げたという奇瑞が表される事により、法然もまた先聖の列に連ねられたのである。

三

続いて、「親鸞伝絵」の中から、夢想を扱った場面を取り上げる。

「親鸞伝絵」巻一段三（挿図3）は、親鸞の夢中に、六角堂の救世観音が僧形となって化現したというエピソードを表す。[10]「六角夢想」「太子告命」等と簡称される逸話である。親鸞が聖徳太子の跡を継いで仏法を広める前兆を表すものとして重視された。

六角宝形造の本堂から、一般に六角堂と称される紫雲山頂法寺（京都市中京区）は、平安京の六角小路（現六角通）の名の由縁として知られるばかりでなく、聖徳太子縁の観音霊場として、中世の人々の信仰を集めた寺院である。その縁起には、聖徳太子が四天王寺建立の用材を求めてこの地に来た時、池で水浴中に置いておいた持仏の如意輪観音像が木から離れなくなり、その夜、観音が夢告により此処が有縁の地である事を示したので、像を安置すべく六角堂を建立したという。



挿図3　「善信聖人親鸞伝絵」巻一段三（部分）　津市・専修寺所蔵　重要文化財

六角堂をめぐっては、太子自身もまた、観音から夢告を受けたという経緯の有った事が知られる。この逸話は、『元亨釈書』（第二十八）にも、

浴已、取像。像重不上。太子、恐、對像祈求。其夜、夢《我、爲汝所持、已七世矣。今又、縁在此地、故爾耳。》太子、欲構宇、安像。

と引かれるなどして、中世にも喧伝されていたらしく、当然、親鸞の知る所となっていたものと推測される。

画図では、上下を霞で覆った画面の中央に、六角堂の境内を表わす。本堂を中心に、手前に山門の屋根、左手に僧房らしき建物、右手に摂社を建ち並べる。周囲には、築地塀を廻らし、左方にも板葺きの門を開ける。本堂前のプランは、後世の『都名所図会』巻一等に描かれる様子と、そう変わらないものである事から、実際の六角堂の有様を写した図様であろうと推察される。しかしながら、本堂は六角円堂と拝所からなる複合建築であった訳であるが、本寺の表象とも言うべき肝心の六角堂自体は描かれていない。何故か。巻末では、堂々たる親鸞の六角廟堂を描ききっているのであるから、複雑な六角形の建造物を描き表すのに困難があったとする訳にはいかない。

親鸞の夢中に六角堂の救世観音が示現したという出来事は、弟子の真仏が書写した『経釈文聞書』（専修寺蔵）中にも引かれる『親鸞夢記』なる書物を本とする。[11] 覚如による「親鸞伝絵」の詞書も、「彼記云」等の文言から、同様の書物に拠ったものとされている。ところが、『親鸞夢記』が記す夢想を、親鸞が得た年次と場所に関しては、幾つかの解釈が為されているようである。従来より、建仁元年（一二〇一）、親鸞が六角堂に百日参籠した際の夢想と同一視する見方がある他、ここでの夢想による所謂「女犯偈」の感得や、続く、東方有情に対する宣誓等の教義的な重み等からも、六角堂参籠時の夢想とは別のものとする説がある。[12]

堂内の右手には、片膝を立てて微睡む親鸞が表される。また、その下に、画中詞として「聖人夢中に六角堂をみたまふところ也」の文言が記される。描画内容と画中詞の意味する所とを合わせて解すると、自分自身が夢見ている場面を、親鸞自身が夢想した光景として表されている、と理解するべきであろうか。絵巻の画図の表現としては、夢見ている人物の姿と夢の中の光景とを同場面内に描き表す手法が、多々見られる様である。図様の解釈に限って言えば、前述の如く、事実関係の整合性を重く見て複雑に理解せずとも、絵巻物絵画に於ける説明的な図法としての範疇で了解し得るであろう。これに対する、覚如自身の手になる画中詞も、場面全体の内容を説明したものと言うよりも、画面内に描き込まれた親鸞の様態について端的に補足したものと受け取るべきであろう。

さて、救世観音は、詞書「顔容端厳の聖僧の形を示現して」に依れば、顔かたちの端正でおごそかな僧の姿に化現したという。詞書後半部には「救世菩薩は即儲君の本地なれば」と、親鸞が後に説いた所を載せている。また、『皇太子聖徳奉讃』（十一首）の内、第二首にも「救世觀音大菩薩、聖徳皇ト示現シテ」と記す通り、救世観音と聖徳太子とは一体のものとして、親鸞は捉えていた様だ。夢中に示現したのは、救世観音であり、同時に聖徳太子

でもあるのである。では、どの様な因縁から、僧形となって示現したのか。

岡西法英氏は、聖僧としての姿を、「聖徳太子の前世の身である南岳慧思禅師」の姿を借りたものかと示唆されている。[13]『皇太子聖徳奉讃』（七十五首）でも、第十一首から第十四首に、太子の前身を列する内に「惠思禪師」の名を挙げる通り、太子と慧思との関係は、親鸞にも承知されていた。[14] しかしながら、他に積極的に、聖僧が慧思の姿を借りたものである事の、蓋然性を証するような資料は管見の内に無い。画図に描かれた僧の姿には、高僧像一般に見受けられる如き、個性を強調した表現は認められず。図像の上からも、特別、これを慧思に結び付ける様な視点を持つ事は出来無い。

僧形となって示現した由縁は、『法華経』の文言に思い当たる部分が有る。所謂『観音経』として知られる『妙法蓮華經』（大正蔵No.二六二）巻第七「観世音菩薩普門品第二十五」は、聖徳太子を通じて観音の威徳を尊崇した、親鸞にも知悉されていたものと推察される。同所には、観音が、遍く衆生を救う為、相手に応じて「仏身」から「執金剛身」に至るまで、様々な姿に応現して説法する事を挙げている。この内、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身を以て得度せんとする者に対しては、観音は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身に現じて説法を為す、と説く部分に着目するべきであろう。

無盡意菩薩、白佛言「世尊。觀世音菩薩、云何遊此娑婆世界。云何而爲衆生説法。方便之力、其事云何。」佛、告無盡意菩薩「善男子。若、有國土衆生、應以佛身得度者、觀世音菩薩、即現佛身、而爲説法。[…]應以比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷身得度者。即、現比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷身、而爲説法。[…]」

即ち、観音は、親鸞の夢中にあっては、親鸞と同位の比丘身として示現した事が理解できる。詞書でも、親鸞は、聖徳太子の本地である救世観音が「本地の尊容をしめすところ也」と説明しているが、比丘身の姿によって本地である観音が示現した、という事を示したものと了解出来る。

堂の中央には、墨染めの衣に白色の袈裟を着けた僧が、白い蓮華座に立ち、親鸞に向かって両手を胸前に差し出し、何事かを教示する体に表される。岡西氏はまた、詞書の「白衲の袈裟」について、『顕浄土真実教行証文類』が引く、最澄『末法灯明記』中の『大術経』の説から、白い袈裟が「末法濁乱の象徴」として受け取られていた可能性がある事を示唆されている。[15・16]『大術経』、つまり『摩訶摩耶經』（大正蔵No.三八三）の本文に「佛涅槃後、[…]千三百歳已、袈裟變白、不受染色。」と記される部分である。[17] こうした記事以外、白色の衲袈裟が表される所以については知見が無い。ただ、視覚的イメージの上からこれを見るに、一般の僧と異なる「聖僧」を表す為に、清浄の印象を持つ白色を、袈裟に当てる事としたものかと考え得る。猶、琳阿本（西本願寺）等、他本では、袈裟ばかりか、僧衣までも白く、全身白衣の尊像として表される様子が看取される。

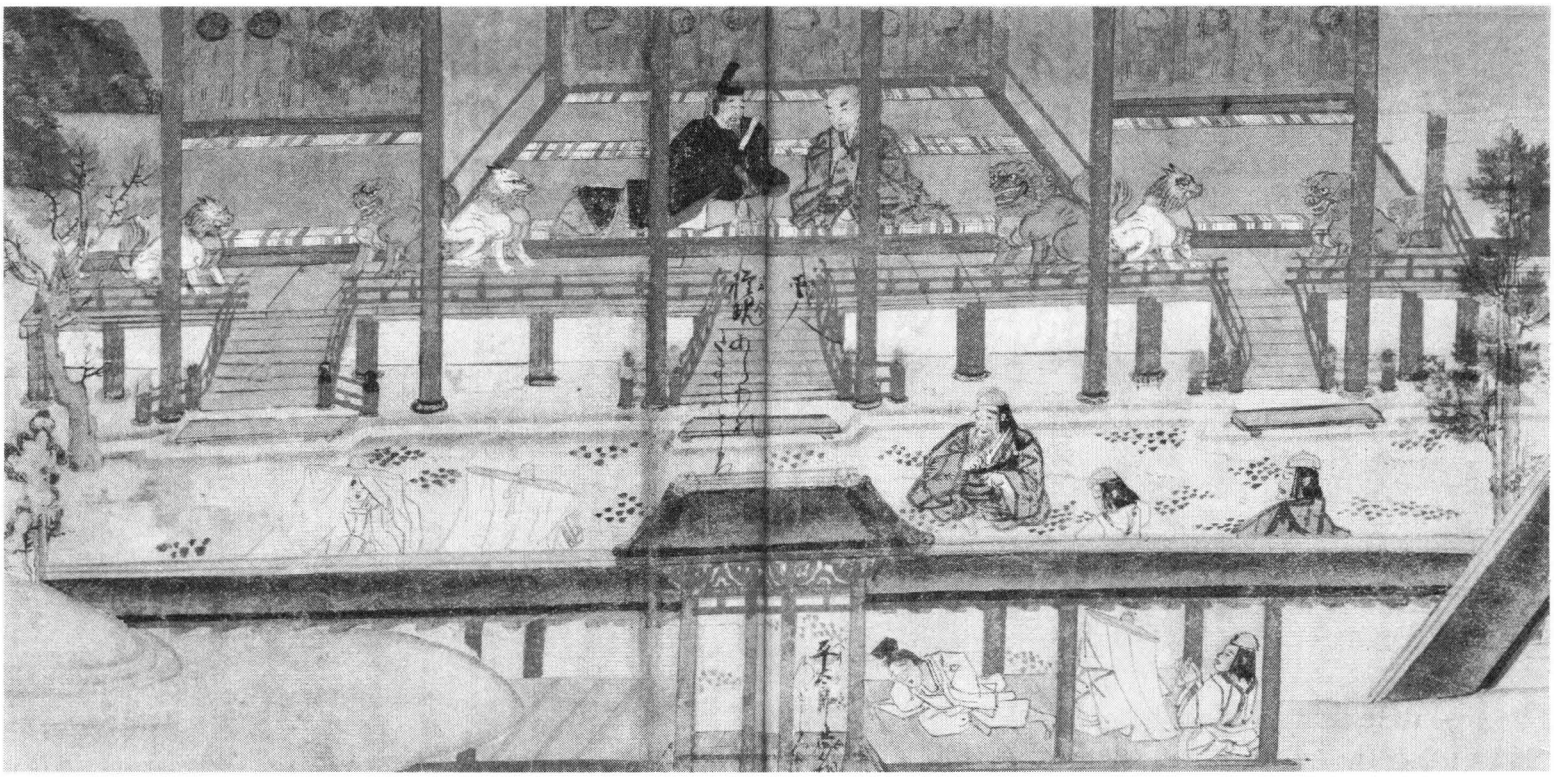
また、詞書に「広大の白蓮花に端座して」と記される、白色の蓮華座の意味についても特段の知見が無い。しかしながら、前述の如く、僧形としての示現が、『妙法蓮華經』が説く如く、比丘身とし

ての応現であるとするならば、経名に縁のプンダリーカ、つまり白蓮華が座に選ばれたものとして、これを理解する事が出来るのではないだろうか。

ここで、僧形は坐像でなければならないところ、高田本の絵では立像となっている。この誤りは、琳阿本（西本願寺）等、殆どの他本では正される事となった（東本願寺の弘願本は立像）。今井雅晴氏は、平安時代半ばから、貴族や庶民の崇敬を集めた六角堂の観音は、示現と夢告とによって霊験を表す事が広く知られていた事を証されている。[18] その中で、今井氏も引く、『今昔物語集』巻一六第三二「隠形男依六角堂観音助顕身」は、妖怪に姿を消されてしまった男が、六角堂に参籠し、観音に祈念して助けを求めると、「暁方ノ夢ニ、御帳ノ辺ヨリ貴気ナル僧出テ、男ノ傍ニ立テ告ゲテ宣ハク」と観音が示現した様子を載せる。この記事から、六角堂の観音は、僧形となって現れ、夢想者の傍らに出で立つものとして語られる場合のあった事が知られる。同様の了解は、「親鸞伝絵」制作者にも、共有されていたのではないかと類推される。同段に於ける描出でも、こうした六角堂観音の霊験にまつわる了解がイメージの基層となって、比丘身に応現した観音は、立つ姿として表されたと考える事が出来る。

さて、親鸞もまた、門弟の夢中に登場する事となった。

巻五段一（挿図4）は、熊野本宮に参詣した、門徒の平太郎の夢中に、熊野権現と親鸞とが示現したというエピソードを表す。[19]「熊野霊告」と簡称される逸話である。熊野本宮の主神、家津御子大神の本地仏が阿弥陀如来とされ、平安後期から鎌倉前期にかけて、極



挿図4　「善信聖人親鸞伝絵」巻五段一（部分）　津市・専修寺所蔵　重要文化財

楽往生を願う諸人による参拝供養が頻繁に行われた状況が、祖師信仰に結び付けられている。

画図では、熊野の峰々が浮かぶ深い霞の中、画面中央には、木立に囲まれた社殿が大きく描かれる。丹塗りの部材が縦横に組み合わされ、繧繝縁に縁取られた青畳が敷き詰められて、けざやかな雰囲気が作り出されている。画中詞にも「熊野證誠殿」と記される如く、熊野本宮第一殿の證誠殿を表したものと知られる。けれども、描かれた社殿の様子は、実際の證誠殿とは大分異なる様だ。

現在の證誠殿は、東隣する若宮王子社と同形式の、熊野造の建築様式を示す。桁行三間、梁間二間のプランを持つが、その前面は一間のものである。一方、證誠殿に西隣しては、結宮・早玉明神を合祀する社殿が建つ。こちらは、桁行五間、梁間四間を有する建物である。その正面には、第二及び第四の間に、九級の木階が下される。また、殿内には、三間の内殿を有し、各々の正面に木階三級が附される。これら社殿の有様はまた、一二九九年に制作された「一遍聖絵」（清浄光寺、国宝）巻三段一にも描かれている。一遍が神託を受けた證誠殿と、その右隣の同形の社殿とが、何れも正面一間に描かれ、回廊を挟んだ左方の社殿が、正面五間、二列の階を有して描かれる様子は、大凡、現在の社殿の有様に踏襲されるものである。

当時にあっても、證誠殿は、「親鸞伝絵」に描かれた社殿よりも、もっと小さな建造物であった様だ。描かれた社殿の規模は、むしろ、結宮・早玉明神を合祀する社殿の方に近い様でもあるが、三下りの階が描かれる等、これともまた、異なる構造である。画図の制作に当たって、證誠殿に関する情報の混乱があったのであろうか。或いは、実際の證誠殿の様子に拘ることなく、観念的に通有の社殿の図様が応用されたのかとも考えられる。例えば、「北野社参詣曼荼羅」（京都、北野天満宮）等で、正面観を重視して図式化された社殿内に衣冠姿の天神が大きく表され、前景の境内には参詣する者達の姿が細々と描かれる如き趣致に通ずる感がある。また、三下りの階の各々に一対の狛犬が控える様は、「石清水八幡宮曼荼羅」（京博、重文）等にも見られる所である。

下段の回廊中には、漸く熊野本宮に到達した平太郎が、その夜を仮寝して過ごす様を描く。折烏帽子を被り、白狩衣を着装し、首に念珠を懸けた平太郎が、深々と寝入っている。画中詞に「平太郎夢想のところ也」と記される通り、この平太郎が、画面上部に描かれる、社殿内の光景を夢見ているのである。

夢中では、証誠殿の扉が押し開かれ、衣冠姿の熊野権現が現れたという。この部分の詞書が欠失している為、『御伝鈔』から、その文言を窺うと、「証誠殿の扉を排きて、衣冠ただしき俗人、仰せられていはく」と物語るのみで、この「俗人」が権現であるのかどうかを直に言っていない。しかし、「親鸞伝絵」では、画中詞に「聖人　権現あらわれたまふところ也」と記される事により、この人物が「権現」を表すものである事が明らかである。

描かれた権現の装束は、垂纓の冠を被り、黒の袍の袖に朱の単が覗く。白の袴の股間に平緒を垂らし、後ろには長大な裾を引いている事から、衣冠というよりも束帯を着した姿であろう。中世には、束帯・衣冠の呼称の別が曖昧となり、貴人の正装の意味で混用され

る事もあつたという。画図では、束帯を着して正装した高位の人物が、笏を執って威儀を正した姿に表されているのである。

長い顎髭等の描出に個性があるかと言えば、しかしながら、これも幾つかの男神像に通じる表現である。因みに、熊野本宮大社の主神として祀られる、「家津御子大神坐像」（木造彩色、重文）は、平安期中頃の制作とされる男神像である。幞頭を頂き、袍をつけ、胸前で両手に笏を構えて正坐する。冠は墨彩、袍は朱彩される。端正な面貌の彩色は後補にかかる部分も多いであろうが、墨で描かれる髭鬚は短いものである。画図に表された権現が、「家津御子大神坐像」を写したものである可能性は低いであろう。画図の権現に、熊野権現としての個別性を表出する様な要素は、特に認められない。男神像一般の姿を借用して、ここに描いたものと考えられる。

その権現が、平太郎が精進潔斎をせずに参詣した事を咎め立てたという。すると、権現に対座する様に、忽然と親鸞が現れた。親鸞は「かれは、善信が訓によりて念仏するものなり。」と、権現に向かって平太郎を弁護した。

親鸞は、既に、巻二段三・巻四段四等に表された姿と同様に、眉尻がピンと跳ね上がった太い眉形を有す、個性的な風貌を示す。腹前に一重の数珠を執り、左右の手を互い違いに向かい合わせて爪繰る仕草で安坐する。その形姿は、「安城御影」（西本願寺）・「熊皮御影」（奈良国立博物館）等の肖像に準じたものである。けれども、ここでは、トレードマークの一である襟首に巻く帽子を、何故か描いていない。直線を連ねて輪郭や襞を描く墨染衣の様は、慣れ衣の如く描かれる「熊皮御影」よりも、強装束を召す如き「安城御影」の表現に近い。何れにせよ、門弟達の尊拝の対象となっていた肖像と同様の、定形化した形姿を、神影と並べて社殿内に配す事によって、親鸞を拝される存在として表したものと知られる。

社殿の結構に枠取られた中、権現と親鸞とが青畳の上に並坐する有様は、幾つかの垂迹曼荼羅に見られる図様との親近性が感じられる。こうした画面では、多くの神像が安坐する様で描かれるが、「親鸞伝絵」の権現は、正坐した姿に描かれている様である。権現は、その膝先の袴の様子や襪が見えない等の事から、安坐ではなく、正坐した姿と判断される。正坐は、「家津御子大神坐像」等、彫像の表現に倣ったものとも考えられるが、また、平太郎を弁護する親鸞の言葉に対し、『御伝鈔』が「ここに俗人、笏をただしくして、ことに敬屈の礼を著しつつ、かさねて述ぶるところなし。」と続ける所の「敬屈の礼」を表した形姿と取る事も出来る。

以上に見て来た様に、「熊野霊告」の画図は、社殿の様子、権現の像容、また、親鸞の形姿に至っても、独自性を持った図様が用いられている様には見受けられない。むしろ、観念的な描写や既成の図柄が組み合わされて一図を成している如くに見られる。逆に言えば、個別的な事象の描出に拘泥しない事によって、明快で象徴性の高い画面作りが志向されたものと考えられる。それは、この段の画図が表出しようとする目的に沿った選択であったと言える。

実質的な親鸞の事績であるとは言えない、平太郎が夢想した所の「熊野霊告」が「親鸞伝絵」の中に一段を占めた理由は、何であったのだろうか。前段の詞書に、常陸国の庶民と記される平太郎は、

「聖人の訓を信て専二なかりき」と、篤信の者として表される。その一方で、熊野に詣でるに「事由を尋申さむために」と、現実生活の中では何よりも師の言葉を頼りに思う、俗人門徒を代表する存在として性格付けられている様である。親鸞は、そうした門徒の誰彼でもある様な平太郎の旅中の夢にさえ現れて、彼を擁護する存在となったと表される。「熊野霊告」の段は、平太郎の夢想を借りる事によって、門徒に拝される存在としての親鸞を描き表す事に主眼があったと考えられる。親鸞が示現する舞台として、熊野の神域が選ばれたのも、当時の人々に周知されていた霊地であったからであろう。更に言えば、既存の仏教界の権威に依る事無く、また、直に本地の阿弥陀を崇めつつ、親鸞の威徳を高める事も適って、実に都合が良かったのではないか。

「六角夢想」の夢想、「熊野霊告」の夢想も、関連づけて了解されるべきであろう。聖徳太子に夢告した観音や、また、本地の観音として親鸞の夢想に現れた聖徳太子の跡を引き継ぐ形で、親鸞もまた、門徒の夢中に現れる存在として表される事になったのである。親鸞自らが顕現する場面を描く事によって、祖師としての聖性を表出しようとした訳である。

四

これらの如き夢想の描出は、一体、夢幻の出来事を題材とした、しかも絵空事としてのみ、受け取られていたのであろうか。

冒頭に挙げた拙稿では、夢想を媒介として奇瑞が示される事は、先行する高僧伝・往生伝の類に既に見られるレトリックであり、三絵伝もこれを踏襲するものである。しかし絵伝の場合は、詞書に記されるだけでなく画図に描かれる事によって、観者は夢中の事と言えども現実の出来事同様の思いでこれを受け止めた事であろうと述べた。

祖師伝絵ではないが、同時代の絵巻物である「春日権現験記絵」に於ける夢想の造形化に関しては、加藤悦子氏による詳細な観察が、既に報告されている。[20] 加藤氏による形式の分類からも、鎌倉後期の絵巻物に於いては、夢の中の出来事が、現実の出来事と同等のレベルで語られ、描かれている様が了解される。

祖師伝絵は、伝記としての記録性を本分としながらも、信仰の対象として説話性をも多分に有している。記録された事柄が絵にも描き表される事によって、臨場感を高め、真実味を増したのと同様、説話の内容も描き表される事によって、現実感を与えられ、信憑性を増したに違いない。絵巻物のメディアとしてのアドバンテージは、テキストのみでなく、イメージによる表象・伝達が行われる点にある。視覚メディアに対する経験の乏しい中世の人々は、フィクション・ノンフィクションの別を問う事を忘れて、眼前の画図に描出された祖師の姿を、脳裏に焼き付けたのではないか。

こうして表された祖師の姿の意味を了解する為には、M・エリアーデが提示した「聖体示現」(Hierophanie) という概念[21]を援用するのが捷径であろう。法然と対面した善導が、法然自身によって阿弥陀の化身と意識され、親鸞に示現した聖徳太子が、救世観音の本地を現していた如きは、何れも、法然・親鸞が体得した「聖体示現」の経験に他ならない。更に、法然・親鸞、それぞれの夢想の前後を

窺うと、法然の体験した「聖体示現」は、既に、善導や少康によって経験されたものであったし、親鸞の体験した「聖体示現」は、既に、聖徳太子によって経験されたものであった訳である。また、これに続いて、今度は法然自身が随蓮の夢中に現れ、親鸞が平太郎に夢見られる事となった。祖師自体が門弟達の夢想の中に示現する様を表す事によって、祖師自身をも、宗教者という意味での〈聖人〉の位に高めたのである。過去の〈聖人〉達によって繰り返された如く、聖体の示現を受ける事が、嗣法者としての資格の承認となり、聖体としてまた自ら示現する事が、伝法者としての超越性の証明となった。

そして、何れも夢想を媒介として「聖体示現」が経験され、記録されている点が興味深い。そしてこれが描出されるに当たっては、夢想を題材とするが故の、自由な作画構想が練られた。また、象徴性を持った描画要素が用いられて、画面に簡明な表現がもたらされた。祖師伝絵に於ける夢想は、聖なるものが顕現する舞台として描出されていたのである。

夢想を媒介として「聖体示現」を表す手法は、「親鸞伝絵」の起草者である、覚如に意識されていたと思われる節がある。晩年の覚如は、「親鸞伝絵」康永本（東本願寺）に於いて、「六角夢想」の段の後に「蓮位夢想」の逸話を挿入した。親鸞の弟子、蓮位の夢に聖徳太子が現れ、親鸞を礼拝して阿弥陀の化身である旨を述べたというものである。この段の補足は、親鸞と聖徳太子との因縁を再確認し、親鸞の〈聖人〉としての性格を強調する目的に因ったものと解されている。

注

（1）「法然上人伝絵」　知恩院（京都市）所蔵　国宝　四十八巻本
浄土宗の開祖、法然（一一三三～一二一二）の生涯とともに、門弟達の事跡を併せ表す。各巻、巻頭に「法然上人行状絵図」、奥書に「四十八巻伝」の称を有す。法然伝絵は、嘉禎三年（一二三七）の二十五年忌に「伝法絵」（秩逸）が作られ、後の伝絵の基となった。これより、四巻本・九巻本などと称される諸本が、次いで制作される。また、正安三年（一三〇一）、法然門流における親鸞の存在を顕彰するべく、覚如が編じた「拾遺古徳伝」によっても、法然の事跡は伝えられた。知恩院本は、先行の法然伝絵を集成し、『無量寿経』に説かれる阿弥陀の四十八大願に因んで、全体を四八巻に構成。二三七段という規模は、絵巻物史上最大。

基本文献
真保亨編『法然上人絵伝』日本の美術　第九五号、至文堂、一九七四
小松茂美編『法然上人絵伝　上』『同　中』『同　下』続日本絵巻大成　一～三、中央公論社、一九八一（挿図一・二は、本書より転載）
玉山成元・宇高良哲『法然上人絵伝講座』浄土宗、二〇〇四
中井真孝『法然絵伝を読む』佛教大学鷹陵文化叢書一二、佛教大学、二〇〇五

（2）「善信聖人親鸞伝絵」　専修寺（津市）所蔵　重要文化財　高田本
浄土真宗の開祖、親鸞（一一七三～一二六二）の生涯を表す。詞書部分は「御伝鈔」、画図部分は「御絵伝」と称される。親鸞伝絵は、永仁三年（一二九五）の三十三回忌に、曾孫の本願寺第三世覚如（一二七〇～一三五一）が詞書を作り、康楽寺流の浄賀（一二七五～一三五六）が画図を描いた「善信聖人絵」（亡佚）が最初。専修寺本は、覚如自身が詞書を書写し、原本と同年に成った。当初、二巻であったものを、五巻に分割改装している。以後、各門派に於いて伝絵の制作が行われ、遺品は多い。同じ覚如に因る、所謂、康永本・弘願本、また、琳阿本などがある。初稿本は一三段から成っていたが、後、一四段・一五段の構成に増加された。

基本文献

『真宗重宝聚英　第五巻　親鸞聖人伝絵』信仰の造形的表現研究委員会編、同朋舎、一九八八

『続々日本絵巻大成　伝記・縁起篇一　善信聖人親鸞伝絵』、小松茂美編、中央公論社、一九九四（挿図三・四は、本書より転載）

小林達朗『絵巻＝親鸞聖人絵伝』日本の美術　第四一五号、至文堂、二〇〇〇

（3）

「法然伝絵」巻七段五　詞書（抜粋）

上人、ある夜、夢見らく《一の大山あり。その峯、きはめてたかし。南北長遠にして、西方にむかへり。山のふもとに大河あり。碧水北より出て、波浪南になかる。河原眇〻として辺際なく、林樹茫〻として限数をしらす。山の腹にのほりて、はるかに西方を見たまへは、地よりかみ五丈はかりあかりて、空中に一聚の紫雲あり。この雲とひきたりて、上人の所にいたる。希有の思をなし給ところに、この紫雲の中より、無量の光を出す。光のなかより、孔雀・鸚鵡等の百宝色の鳥、とひいて、よもに散し、又、河浜に遊戯す。身より光をはなちて、照耀きはまりなし。其後、衆鳥とひのほりて、もとのことく紫雲のなかにいりぬ。この紫雲、又、北にむかひて山河をかくせり。かしこに往生人あるか、と思惟し給ほとに、又、須臾にかへりきたりて、上人のまへに住す。やうやくひろこりて、一天下におほふ。雲の中より一人の僧出て、上人の所にきたり住す。そのさま、腰よりしもは金色にして、こしよりかみは墨染なり。上人、合掌低頭して申給はく「これ、誰人にましますそや」と。僧、答給はく「我は是、善導なり」と。「なにのために来給そや」と申給に、「汝、専修念仏をひろむること、貴きかゆへに来れるなり」との給》とみて夢さめぬ。

（引用史料中の点・括弧は、仙海が私に付した。以下同様）

（4）

「夢感聖相記」（『拾遺黒谷上人語燈録』巻上　附。全文）

源空、多年勤修念佛。未曾、一日敢懈廢焉。一夜、夢《有一大山。南北悠遠、峯頂至高。其山西麓、有一大河。傍山、出北流南。濱畔渺茫、不知涯際。林樹繁茂、莫知幾許。予、乃飛揚、登於山腹、遙視西嶺。空間、有紫雲一片、去地可五丈。意之、何處有往生人、現此瑞相。須臾、彼雲、飛來頭上。仰望、孔雀・鸚鵡等衆鳥、出於雲中、遊戯河濱。此等衆鳥、身無光明、而照曜無極、翔飛、復入雲中。予、爲希有思。少時、很［彼］雲北去、覆隠山河。復以爲、山東有往生人、迎之。既而須臾、彼雲、復至頭上。漸大、遍覆於一天下。有一高僧、出於雲中、住立吾前。予、即敬禮、瞻仰尊容。腰上半身、尋常僧相、腰下半身、金色佛相。予、合掌低頭、問曰「師是何人。」答曰「我是、唐善導也。」又、問「時去代異。何以、今來于此耶。」答曰「汝能、弘演専修念佛之道、甚爲希有。吾、爲來證之。」又、問曰「専修念佛之人、皆得往生耶。」》未答、乃覺。覺已、聖容、尚如在也。建久九年五月二日、記之。源空。

（5）

「法然聖人御夢想記（善導御事）」（『西方指南抄』巻中　本。全文）

或夜、夢ミラク《一ノ大山アリ。ソノ峯キワメテ高シ。南北ナカクトオシ。西方ニムカヘリ。山ノ根ニ大河アリ。傍ノ山ヨリ出タリ。北ニ流タリ。南ノ河原眇トシテ、ソノ邊際ヲシラス。林樹滋滋トシテ、ソノカキリヲシラス。ココニ、源空、タチマチニ山腹ニ登テ、ハルカニ西方ヲミレハ、地ヨリ巳巳上五十尺ハカリ上ニ昇テ、空中ニヒトムラノ紫雲アリ。以爲「何所ニ、往生人ノアルソ哉。」ココニ、紫雲トヒキタリテ、ワカトコロニイタル。希有ノオモヒヲナストコロニ、スナハチ、紫雲ノ中ヨリ、孔雀・鸚鵡等ノ衆鳥トヒイテテ、河原ニ遊戯ス。沙ヲホリ濱戯、コレラノ鳥ヲミレハ、凡鳥ニアラス。身ヨリ光ヲハナチテ、照曜キハマリナシ。ソノノチ、トヒ昇テ、本ノコトク紫雲ノ中ニ入畢ス。ココニ、コノ紫雲、コノトコロニ住セス。コノトコロヲスキテ、北ニムカフテ、山河ニカクレ了ス。マタ以爲「山ノ東ニ、往生人ノアルニ哉。」カクノコトク思惟スルアヒタ、須臾ニカヘリキタリテ、ワカマヘニ住ス。コノ紫雲ノ中ヨリ、クロクソメタル衣著僧一人、トヒクタリテ、ワカタチタルトコロノ下ニ住立ス。ワレ、スナハチ、恭敬ノタメニアユミオリテ、僧ノ足ノシモニタチタリ。コノ僧ヲ瞻仰スレハ、身上半ハ肉身、スナハチ、僧形也。身ヨリシモ半ハ、金色ナリ。佛身ノコトク也。ココニ、源空、

合掌低頭シテ、問テマフサク「コレ誰人ノ來リタマフソ哉」ト。答テ曰「ワレハ、コレ善導也」ト。マタ、問テマフサク「ナニノユヘニ、來タマフソ哉。」マタ、答曰「余、不肖ナリトイエトモ、ヨク専修念佛ノコトヲ言。ハナハタモテ貴トス。タメノユヘニモテ來也。」マタ、問テ言ク「専修念佛ノ人、ミナモテ爲往生哉」ト。》イマタソノ答ヲウケタマハラサルアヒタニ、忽然トシテ夢覺了。

(6) 「源空聖人私日記」(『西方指南抄』巻中　末。抜粋)
倩思此事、暫伏寢之處、示夢想。《紫雲廣大、聳覆日本國。自雲中、出無量光。自光中、百寶色鳥、飛散、充滿虚空。于時、登高山、忽、拜生身之善導。自御腰下者、金色也。自御腰上者、如常。高僧云「汝、雖爲不肖之身、念佛興行、滿于一天。稱名專修、及于衆生之故、我來于此。善導、即我也。」云云。》

(7) 『善導寺蔵『本朝祖師伝記絵詞』本文と研究』中井真孝編、佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇七。「影印篇」に全巻の図版が掲載される。

(8) 林　淳「法然の夢」山折哲雄編『講座　仏教の受容と変容　六　日本編』佼成出版社、一九九一。第七章より。

(9) 「法然伝絵」巻二〇段二　詞書(部分)
ある夜のゆめに《法勝寺の西門より入て見れは、池のなかにいろ〳〵の蓮花さきみたれたり。西の廊のかたへあゆみよりて見れは、僧衆あまた烈座して浄土の法門を談す。随蓮、きさはしにのほりあかりてみれは、上人北座に南むきに坐したまへり。随蓮、見たてまつりて、かしこまるに、上人、見たまひて「これへまいれ」とめしけれは、まちかくまいりぬ。随蓮、いまたことはをいたさゝるに、上人、の給はく「汝かこのほと心になけきおもふこと、ゆめ〳〵わつらふへからす」と。随蓮、この事すへて人にも申さす。なにとしてしろしめしたるにか、とおもひなから、上件のやうをくはしく申に、上人、仰られていはく「たとへはひか事をいふものありて、あの池の蓮花を、『蓮花にはあらす。梅そ桜そ』といは、信すへしや」と。随蓮、申て云「現に蓮花にて候はむをは、いかに人申候とも、いかてか信し候へき」と。上人、の給はく「念仏の義も又かくのことし。源空か汝に『念仏して往生する事は決定して疑なし』とをしへしを、信たるは、蓮花を蓮花とおもはむかことし。ふかく信してとかくの沙汰に及はす、たゝ念仏を申へきなり。あらぬ邪見の桜梅の義をは、ゆめ〳〵信すへからす」と仰らる》とみてゆめさめぬ。

(10) 「親鸞伝絵」巻一段三　詞書(部分)
建仁三季(辛酉)四月五日夜寅時、聖人夢想告ましくき。彼記云「《六角堂の救世菩薩、顔容端厳の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を着服せしめ、広大の白蓮花に端座して、善信に告命して言『行者宿報設女犯。我成玉女身被犯、一生之間能荘厳、臨終引導生極楽。』文。救世菩薩、善信に言『此是、我誓願也。善信此誓願の旨趣を宣説して、一切群生にきかしむべし』と云々。尒時、善信、夢中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば、峨々たる岳山あり。その高山に、数千万億の有情群集せりとみゆ。そのとき、告命のごとく、此文のこゝろを、かの山にあつまれる有情に対て、説きかしめをはる》とおぼえて、夢悟了。云々。」

(11) 『親鸞夢記』云「《六角堂救世大菩薩、示現顔容端政之僧形。令服著白納御袈裟、端座広大白蓮。告命善信言『行者宿報設女犯。我成玉女身被犯、一生之間能荘厳、臨終引導生極楽。』文。救世菩薩、誦此文、言『此文、吾誓願ナリ。一切群生、可説聞告命。』因斯、告命数千万有情、令聞之。》覚夢悟了。」

(12) 宮崎円遵『底本　親鸞聖人全集　第四巻　言行篇』親鸞聖人全集刊行会編、法蔵館、一九六九。言行篇(2)解説「五　親鸞夢記」等より。

(13) http://anatamo.sakura.ne.jp/index.shtml。岡西法英の浄土真宗 v 聖典講座 v「恵信尼の手紙」に於ける注より。

(14) 『皇太子聖徳奉讃』(七十五首)
(11)
聖徳太子印度ニテハ、勝鬘夫人トムマレシム。
中夏晨旦ニアラワレテ、恵思禪師トマフシケリ

(12)
晨旦華漢ニオハシテハ、有情ヲ利益セムトシテ、男女ノ身トムマレシメ、五百生ヲソヘタマヒシ

(13)
佛法興隆ノタメニトテ、衡州衡山ニマシマシテ、數十ノ身ヲヘタマヒテ、如來ノ遺教弘興シキ

(14)
有情ヲ濟度セムタメニ、惠思禪師トオハシマス。衡山般若臺ニテハ、南岳大師トマフシケリ

(15)
注13に同じ。

(16)
『顯淨土眞實教行證文類』「顯淨土方便化身土文類六」披閲『末法燈明記』（最澄製作）曰［…］問「若爾者、千五百年之内、行事云何。」答「依『大術經』、佛涅槃後、［…］千三百年、袈裟變白。［…］」

(17)
『摩訶摩耶經』（大正蔵№三八三）巻下
時、摩訶摩耶、聞此語已。又、增感絶。即、問阿難「汝、於往昔、侍佛以來聞世尊、說如來正法幾時當滅。」阿難、垂涙、而便答言「我、於往昔、曾聞世尊、說於當來法滅之後事、云「佛涅槃後、［…］千三百歳已、袈裟變白、不受染色。［…］」

(18)
今井雅晴『親鸞と浄土真宗』吉川弘文館、二〇〇三。第一章　親鸞と恵心尼、第一節　親鸞の六角堂の夢告、「一　六角堂の夢告」より。

(19)
「親鸞伝絵」では、該当する内容部分の詞書を欠失している為、『御伝鈔』下巻（五）「熊野霊告」（部分）を参照する。
参着の夜、件の男、夢に告げていはく《証誠殿の扉を排きて、衣冠ただしき俗人、仰せられていはく「なんぢ、なんぞ、われを忽緒して、汚穢不浄にして参詣するや」と。そのとき、かの俗人に対座して、聖人、忽爾としてまみえたまふ。その詞にのたまはく「かれは、善信が訓によりて念仏するものなり」と云々。ここに俗人、笏をただしくして、ことに敬屈の礼を著しつつ、かさねて述ぶるところなし》とみるほどに、夢さめをはりぬ。

(20)
加藤悦子「「春日権現験記絵」に見られる夢の造形について」『美術史家、大いに笑う　―河野元昭先生のための日本美術史論集』河野元昭先生退官記念論文集編集委員会編、ブリュッケ、二〇〇六

(21)
ミルチャ・エリアーデ『聖と俗』風間敏夫訳、法政大学出版局、一九六九、叢書・ウニベルシタス。序言、「聖なるものはみずから顕われる」等より。

仙海義之（せんかい・よしゆき）
一九九九年　東京芸術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻博士課程中途退学
一九九九～二〇〇二年　東京芸術大学美術学部　非常勤講師（日本・東洋美術史研究室助手）
二〇〇二年　財団法人香雪美術館　学芸員（現職）